
信幸、新たな旅立ち。拝啓親方様・・・僕は未だそちらには逝けぬようです

春

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信幸、新たな旅立ち。 拝啓親方様・・・儂は未だそちらには逝けぬようです

【Nコード】

N7863Q

【作者名】

春

【あらすじ】

戦国の覇者<武王>と謳われた信幸は88で世を去った。実に大往生。彼の死に様は実に穏やかだった。しかし次に彼が目を開いたとき彼は三途の川をすっ飛ばして転生して!?!・・・何度目かの転生を繰り返した最強爺言葉の青年は今度はいつの間にか森の中に!そこは剣と魔法の世界で?!じーちゃん今回はどんな最強物語を創って行くのか!乞うご期待(笑)

武王信幸の軌跡（前書き）

様々な世界に異世界転生トリップを経験した未だ一度も三途の川に辿りついた事のない主人公。時折というか結構漫画やアニメや小説のキャラ名が登場します。無理な方・嫌悪感のある方はブラウザバツクして脳内から抹消してくださいませ

武王信幸の軌跡

戦国時代

数多の領主達が天下を狙った時代

やがてその天下を見事にとった者がいた

魔王である織田でも霸王の豊臣でも・・・はたまた奥州の龍の伊達でもなくば三河の徳川でもなかった

その力、まさに武王にふさわしく、一騎当千どころか一騎当万の膂力りよりよく

3

穏やかなれど胸に秘めたりしは熱き魂いじき

その者、＜武王＞ 信幸と云う。甲斐の虎、武田信玄の御名の元ありとあらゆる困難に打ち勝った智将真田の長子である

穏やかにしかし毅然として太平の世の基礎を作り

民から尊敬と敬愛を一身に受け

その者この時代にしては珍しく、 齡 88 迄生きた。

彼の最後はまさしく彼にふさわしく、 大勢の家臣に親族に看取られ
穏やかなものだった

彼は、己の死をしっかりと理解して笑ったのだ。 izz そ晴れやかに

izz そ穏やかに。 彼は言った

- 漸く、親方様・・・信玄公の御許に参る事が出来る。 先に逝つ
た戦友(という名の嘗ての敵大将達
)と茶でもしばきながら現世を眺むる事としようかのう。 しかと治
めよ -

最後の言葉は自身の息子でしっかりと次代泰平の世の長として教育さ
れ、信幸の後を継ぐ息子と(スパルタ教育だった)

その息子で(つまり信幸の孫)三代目(現在父からスパルタ教育を
受けている)はしっかりと頷いた

信幸はそうして満足そうに眼を閉じ逝ったのだ

享年 88

信幸の最も好んだ梅の花が満開の頃であった

武王信幸の軌跡（後書き）

始めてしまいました。見切り発車

生温かく見守って下されば幸いです

軌跡ゝ始まりは一体どれほど前であつたかゝ

鬱蒼とした森

光が地に届かず、生えているのは苔ばかり。いやはや今生は普通の平凡な人生の予定であつたが……

やれやれと溜息を吐いたのは今年肉体年齢18を迎え魂の年数はとうに数百……所か万をこえるやも……を数える爺

名を真田信幸さなだのぶゆきという。つい先ほどまで大学受験をしていた彼は（一応彼と言う事にしておこう）、普通なら驚愕し自身の状況に混乱するだろうに見事に落ち着いて溜息を吐いている。

落ち着いているのも無理はない。彼は今までに似た状況を数え切れないほど経験したあり得ない魂の経歴の持ち主なのである

「今回で何回目じゃ……閻魔は余程儂が嫌いに見える。

一体儂が何をしたというんじゃ。そりゃあ良人かと言われれば違つと即答できるが……」

彼の一番最初の記憶

つまり彼の根本の性質は武人だ。それも戦国の世を駆け抜けた雄である

更にその次の世では忍（暗殺が主な仕事。他に国攻め・城落としてもしていた）

他に聖職者として人為らざるモノと戦った事もあるし、侍として宇宙人と戦ったり、死神したり麒麟と共に一国を治めたり、海賊したりもした。

様々な時代、様々な人々、様々な世界、歴史、文化が信幸の魂に消えず刻まれている。

そんな彼は溜息を吐きつつも現状把握に気配を探った

気配を探る事など、18年かそこら現代の平和な国日本に生きていようと信幸にとっては関係なく、朝飯前であつた。

「獣が多いな。しかも可笑しな気配じゃな。漂うのは何やら濃密な感じが・・・今まであまり遭遇した事がないのう・・・否、獣の気配は楽俊殿やコチヨウに似ているか？どちらにしても現代日本で

は絶対無いな。

面倒なことになった。何時もの事ではあるが・・・」

やれやれと溜息を吐き学生服の上を捨て、ネクタイを乱雑にズボンのポケットに入れ、ワイシャツのボタンを上から2つ外し身軽にする。

こんな時の対処は最早嫌なほど付いたものだ。

此方を伺う幾つもの気配

向こうは此方を獲物として見ている以上、あまり呑気であるのは得策ではない。（呑気と見せて全く隙はなかったが）

「誰が言ったか弱肉強食

この世の最も単純にして明快な理^{ことわり}。

僕はモノグサなんじゃ。早く終わらせようではないか」

獣を誘う

その瞳は武人のもの

「今の儂は丸腰ぞ？さあ早う参るがいい」

触発された獣たちが一斉に日陰から飛び出してきた

信幸が突然招かれた世界。

数多の種族が住まうその世界の名は<レーベン>

幾つもの火山を有する鍛冶師の国<ヴルカーン>

国の大半を緑に覆われ自然とともに生きる豊かな国<ゲヴェクス>

世界の数多の人ならざる生物が住まう国<フリーユージェル>

世界の6割の人間族が住まう国<ヴォール>

他にも少数民族・・・というか種族・・・の小さな島があるらしい。

この世界の基本は精霊や魔力によるらしい。人の優劣や獣たちの優劣も、どれほどこれらが使いこなせるかで決まるようだ。他にも属性というのがあるらしい。

信幸がいるのは<フリーユージェル>に近接した<ヴォール>北の森ブルータル。知性の低い食欲に忠実な獣の棲みからしい。

ちなみに信幸はこれらの情報を、あつさり倒したこの森の獣達から（脅し）聞いた。人語を喋った事にはたいして驚かない。予想の範囲内である。

・・・この思考だけで信幸という爺がどんな人生を送ってきたか垣間見えるというものだ。

軌跡ゝ始まりは一体どれほど前であつたかゝ（後書き）

信幸さまは最強（笑）そして苦労人

軌跡2（前書き）

視点変更

軌跡2

王都神殿内神降ろしの間

その中心にある泉には北の森にいるはずの信幸の姿が写し出されていた

「どうやら当代護り手は優秀な様ですね…」

ほつつと感心したように息を吐いたのは白銀の髪を揺らす美丈夫

「良かった〜北の森なんか飛べしちまったから心配してたんだよな」

明るく言うのは赤髪の快活そうな美丈夫

「そも貴様が場所を違えるからこの様な事になる」

白銀の美丈夫はツイッと視線を赤髪の美丈夫に向けた

「まあ無事だしな！っ！？」

「どうした？」

「ヴァン、今回の護り手、此方を見ている……！」

バカなことを、と泉に視線を戻せば確かに此方を見て睨む信幸

視線が絡んだ瞬間ゾクリと背筋を悪寒が走る

北の森を覗く術は最高位の神官故に使える術だ。

神と精霊の力を借りて神水である泉に映す

それは写されていることを察する事の出来る次元にないのだ。

というのに、当代護り手は此方をしかと見ているではないか

白銀の美丈夫、ヴァンは目を見開き、そうして傍らで同じく固まっていた赤髪の美丈夫を見た

「急いで当代護り手を此処へ」

「あ、ああ」

頷いた赤髪はいずまいを正し、泉に向かって両手を広げる

【この世全てを自在に行き来する風霊よ北の森に在りし我が望む者を此処に

契約者、神官クルガが命ず】

赤髪、クルガが呼び掛け、次の瞬間、泉に…水面に立つ青年がいた

軌跡2（後書き）

次は説明になる、かな？

軌跡3

突風と共に一瞬で居場所を移動させられた信幸は不快そうに泉の上に立っていた

どうやらチャクラを扱える世界らしい。忍術が使えるかは分からないが、チャクラを利用出来るだけでも手段は増える

そうして此方をずっと見ていた気配の主を眺める。不快なのは勿論だが、同時にある一定の事実確認は必要

面倒だと内心思いつつ此方を硬直して見ている若者二人を不躰とは思いつつ眺めた

白銀の髪を持ち主は美丈夫だが神経質っぽい

赤い髪を持ち主も美丈夫だが白銀の美丈夫とは違い快活そうだ。

「埒が明かぬ。いい加減硬直を解き事情を説明せよ」

溜め息を吐きつつ信幸が口を開けばビクリと身体を揺らし視点を覚としたものにした

「先ずは名前を問う」

我が名は真田信幸。主等ぬしの名は？と言うか儂の言語は通じているか」

「え、え。言葉は解ります

私の名はヴァン。この国最高位の神官をしております

横の赤髪はクルガ。同じく神官です」

ヴァンは戸惑いながらも名を告げた

「勿論、イロイロ説明して頂けるのであろう？」

信幸の目は若干据わっており、チャツチャカ喋れと目が、口ほどにモノを言っていた

「長い話になります。とりあえず、場所を移動いたしましょう。召し物も、汚れてしまった事ですから……」連れてこられた部屋で新品の淡い水色のゆったりした服を渡された。

「これはこの国の一般的な衣服でエルといいます。室内で過ごす時は此れを着てゆったり過ごすのがこの国ならではの習慣になります」

渡された服に着替え移動する。泉のあった大きな聖堂から離れ、静かな回廊を渡り辿り着いたのは海に面した白い部屋だった

信幸はヴァンに促され座り心地の良いソファーに座る

ヴァンとクルガは机を挟んだ前のソファーに身を沈めた。

どちらも少し、気難しい顔をしており、やはり厄介事に巻き込まれたかと溜め息を吐いた

軌跡3（後書き）

説明はこの次に持ち越し

軌跡4（前書き）

結局まだ・・・視点変わります

軌跡4

「まず聞いておかねばならぬ事が一つある」

当代護り手が真っ先に口を開いた事に私は驚いた。

「なんでしょうか」

「この世界から元の世界に帰る方法が有るか否かを伺いたい」

それは真っ直ぐに現状を見つめる者の目だった。決して混乱ばかりでなく冷静に物事を判じようとしている。怒るでも喚くでもなく、だ。私は極めて珍しい種の人間だと判断した

しかし我等は今度こそ怒りに晒されるだろう

なぜならば、帰る方法は・・・・・・・・・・・・・・・・0

「ああ、よいよい。その顔を見れば分かった。

帰る方法はないのか」

私やクルガが伝えかねていると雰囲気を感じたのか息を吐きながら
呟かれた

「私達神官は、神の声を聞き、精霊達に力を借りてこの国を導く
です。

私達は精霊に問いました。当代護り手に相応しき方をお連れしてく
れと。何時もならば・・・この世界のうちより連れてくるのです。
ところが、精霊達は貴方を連れてきてしまった。世界を越えるなど
普通はあり得ないのです。そんな事をすればただでは済まないの
ですから」

私のセリフを聞いた護り手殿が眉根を寄せたのに気付いて言葉を
つづけた

「・・・貴方は、どうやら我が世界の神々と相性が良かったよう
なのです。ですから、五体満足、魂も無事にこうして私の眼前にいら
っしゃる。奇跡、なのです」

私のセリフに顔を上げた護り手殿は私とクルガを代わる代わるその
瞳に写された

「……儂には分らぬ事の方が多い。じゃが、帰れぬのであれば何時までも固執していても仕方あるまい。この世界の事を教えていただけるか」

予想外すぎるセリフに驚いた。

そうして感謝した。我等の失態を許された訳ではないだろうが、それでも我等を見て下さるこの護り手殿の器の大きさに。

私は生活様式から歴史、種族等の話を太陽が西に沈むころまで話し続けた。

信幸殿（そう呼ぶ許可を下さった）は時折その深き知を持って様々な質問をされ納得されていた。

「最後に聞きたい。儂が護り手になるのは決定済みなのか」

「いいえ。まだ天啓は降りておりませぬ。精霊達は信幸殿の他に5人の候補を連れてきた。いずれかの御仁が選ばれ護り手になられます。それを決めるのはこの世界の神々で、次に天啓が下る時にわかるのです。それは期限の1月前。つまり半年後の月と太陽の混じりし暁時なのです」

「それまでどうして暮すのか決まっておるのか？」

「他の5人の候補者達は神殿に住まわれております」

「ならば、儼は城下に住みたい。この世界を知る必要があるし、余り清廉すぎる所は居心地も悪い。」

そのセリフに頷いた。こうして此方の都合で滞在していただくのだ。それ相応に持て成すのは道理

「半年はお言葉に甘えて居候しようかの。半年が過ぎ天啓とやらが儼に下らなければ、就活じゃな」

カラカラと可笑しそうに笑った信幸殿の笑みを我等は漸く見る事が叶ったのであった

軌跡4（後書き）

ご指摘くださった方！有難うございました。お気に入り登録も有難うございます！

軌跡5（前書き）

信幸視点で

軌跡5

ヴァン殿から聞いたく護り手>と儂が呼ばれた理由の話を要約するところなる

この国と隣国<フリーユージェル>には500年前終結したが戦争をした時代があった。それは300年戦争と言い、文字通り300年続いた戦争であった。

双方の国力は低下しとうとう500年前の国王同士が同盟に至ったという。

フリーユージェルの提示した条件は2つ

1に捕虜の解放。これは直ちに行われた

そしてもう一つが問題であった。それは、一代の国主につき一人、純血の王の娘をフリーユージェルに捧げる事。つまり贄である

その時の王は受諾し、現在までこの条件は続く。

この条約は神の御許で行われた制約。純血の王の娘というのは生ま

れた順でも正妃の子か側女の子かでもなく、神が決めるようで、その娘は生まれた瞬間印があるのだとか

信幸が呼ばれた原因がこれだった。

500年前のこの国の王は娘が愛しく、戦争終結の為とはいえ、弔り殺させたくはなかった。

故にある条件を付けた

それが<護り手>である。いうなれば近衛兵のようなもの。姫の命を守り見守る存在。

<護り手>の条件は<強さ>だった。しかしそれは純然たる力というわけではない。フリーゲルの住民から姫を弔り殺させないように知恵も力も経験も様々に考慮された強さ

その<護り手>は純粹と言える精霊が探するのが通例だ。

そうして天啓によって選ばれた<護り手>と姫は姫が18の誕生日にフリーゲルに行く事になっている。

軌跡6（前書き）

信幸は女子供に優しい紳士な爺ちゃん

軌跡 6

信幸の生活の保証は少なくとも半年はある

国を知るためにも城下に住む事になった信幸は貸し与えられた家を見て中を見てポカンとした

家は一人で住むには広々とし、家と言うより屋敷な佇まいだ。中に入れば家具が備え付けられ、ヴァンとクルガの連名で衣料品や生活雑貨、当面の食料と調味料等々が届けられていた

「二人には多大なカリが出来たかのう」

しかし本当にタイミングがよかった。

荷物の荷ほときは後回しにして、影分身を作って衣料品の中の大きな布を持たせ共に、屋敷の奥、風呂場に入るのであった

ここで信幸の腕に視点を集中させてみよう

腕には布に包まれたナニか

ソレは、城下に降りて早々に信幸が拾ったモノ

ちなみに拾ったというのは少々語弊がある。とてもじゃないが合法に見えぬ集団を視界に認め、ソレ等が運ぶ布に覆われた四角の箱型を認めた信幸は、音もなく時には屋根を駆け後を追った

それは違法な人身売買を行う集団で

四角の箱は商品たる人を入れた檻

中に見えた怯えた幼子を見た瞬間信幸は神降ろしの間で見せた顔とは比べ物にならない不快だと言う顔をした

瞳はどこまでも冷酷にひそめられ

普段は穏やかな眼差しに陰が混じり

雰囲気は春の日向から冬の氷の冷たさに変わる

―視点?―

突然、馬車が止まった

何だろう…と檻に入れられた仲間達と身を寄せあった。

檻を覆う布のせいで外の様子は分からないが、悲鳴が聞こえ一層身を寄せる

何分経ったか分からないが悲鳴が止まった。かと思えばバサリと檻を覆う布が外された

「……………大丈夫か?怪我はないか」

暗い檻を光で満たしたのは酷く優しい目をしたヒトだった

軌跡6（後書き）

信幸は正義じゃない。自分の信念に従う侍

軌跡7（前書き）

信幸の生きざまを少しだけ

軌跡7

人身売買を行おうとした輩は既に世から抹消した

こんな時、自身の手は紅く緋く濡れているのを自覚する。だからどう。という訳ではないのだが

あの戦国の世、何より尊敬した御方の思想や理想は信幸にとっても同じで

信幸は侍であり武將だ

戦が始まれば策を練り、馬を操り、己が得物の身の丈ほどある大刀を操り戦場を駆け抜けた

信幸が《武王》と称されるだけその手は紅く染まったのだ。

後悔はしたことはない。すると言っことは己が倒した者達への侮辱だと思うからだ。

そうして戦国を駆け己も死に三途の川に行くこと無く転生した先で、託された太陽の子

途中仲間にしていった元犯罪者達と共に今度は忍として駆けた

信幸の魂に刻まれた数だけ信幸はその力を発揮した

血に、時にはオイルを浴び己の信じるものに従って来たのだ。

この歩んだ道に悔いも後悔もないのだと、笑い

飛ばしていた意識を戻して檻を覆う布を外した

檻には怯えた子供がビクリと肩を揺らし見上げてきた

「……大丈夫か？怪我はないか？」

軌跡7（後書き）

前の話の信幸視点

軌跡8（前書き）

何でも使える爺クオリティ

軌跡8

怯えた子等を檻から出してさらにその手足と首にある重たい楔を外す

「拐われた子の内家に帰れる子はいるか」

信幸の言葉の異図は簡単だ。こういう子は全てが拐かされた訳ではない。生活苦を理由に少ない金で子売る親もいるのだ。

そろりと上げた手の主達を影分身に託す。

人生初の忍術だろう子供達は目を瞬かせた

「家まで送るゆえ案内をしておくれ」

送りに行った影分身を見送り残った子を見る

子は三人おり全員年齢性別種族バラバラだが獣人族のようだった。

既に長いこと奴隷経験を持つらしい子等はお世辞にも健康的には見えない

「今から主等を小さくする。驚くなよ?」

無理な台詞だ

二回り小さくして獣化させると腕に抱え布で風圧にさらされないようにくるみ、地を蹴った

残ったのは壊れた檻と馬のいない荷台のみであった

宛がわれた屋敷に到着し

与えられた贈り物に目を見開き苦笑するも、腕の中の存在に意識を戻し直ぐ様浴場に着くと布を取る

二回り小さくした（これは魔法）術を解くと目をしばたかせた子供が三人

「まずは風呂！！それが終わったら手当てをして、飯にしよう」

ぐしゃぐしゃと髪をかき混ぜた

キヨトンとする子達に笑い自身も腕を捲り洗う準備をする

子達にとっての未知の時間が始まった。もともと、体を拭ったり、水で行水はしても湯に浸かったり洗ったりしたことが無かったのだ。

信幸が巻物に手をつく。すると巻物にしまっていた物が口寄せ出来た

取り出したのはシャンプー・リンス・ボディソープ

（何であるか？受験の終わった後薬局で安かったんだよ。）

3つに尽きぬ魔法を掛けてさて洗うか。と気合いを入れるのであった

軌跡8（後書き）

次はほのぼのの出来ると良いなあ

軌跡9（前書き）

命名

軌跡9

子供達にとって初めてのお風呂は酷く楽しいものだった

優しい手付きで髪を洗われてモコモコ泡立つ

何なのかよくわからないけど鼻につかない臭いは心地よかった。

時折ピリリと傷に滲みだが丁寧に丁寧に洗われて心は酷く穏やかだ

「よし。洗い終わったら順に湯に浸かれ。暖まったら出るぞ」

少し温い湯は、身も心も弛緩させた

「あの…白虎が寝ちゃった」

「はは。安心したのかのう？溺れると行かないな

お前達は温まったか？」

「うん」

コクンと頷いた子に微笑み三人まとめて抱え上げ湯から出すと今度は手早く水滴を拭っていく

ワシャワシャとされるが楽しいのか起きた子もキャアキャアと笑う。真の子供の笑顔に微笑んだ

入浴中に影分身に作らせたスープを持たせ三人がゆっくり飲む間に手当てをしていく。

獣人と人は相違が余り無いようで、医療忍術を使うことが出来たのは幸いだった

淡い光で傷を治療し食欲はあるようのだが、体の衰弱様を見て胃に優しい牛乳粥を作る

信幸も軽い飯を作りソファーに身を沈めながらの食事となった

更に食事中、自己紹介も済ませる。

白虎のNo.725872

梟のNo・26863

水龍のNo・52333

「奴隸の番号は名とは言わぬな」

「名前をくれるの？」

「ふむ。良いのならば」

【欲しい】

「なれば、白虎は桜

梟は小梅

龍は楓で良からう。」

「サクラ？」

「コウメ」

「カエデ…ありがとう！」

それは奴隷から解放された瞬間でもあった

軌跡9（後書き）

桜は日本の国花

梅は爺が好きな花

楓は作者が好きな漢字
↑

軌跡10（前書き）

招待

軌跡10

新しい生活は中々賑やかなものとなった。

桜は養子にし小梅と楓はもう少し大きくなった時選択させる。

人を親にすると、いつか獣人族として祖国の土を踏んだとき、周囲の反応はきつと大変なものだろう。ならば本人の分別が付くまでは居候として留め置き、選択の時を待つ方が良かろうと判断した

ヴァン達は大層驚いていたが、法的には無問題らしく良かった。

貸し与えられている屋敷は【回】の形をしており、中心の【口】は庭になっており子等の遊び場や信幸の鍛練の場になっている。

初めは貧弱だった三人はよく食べよく眠りよく遊ぶを一月繰り返すと子供本来の丸みを持った体つきに戻る。

三人は種族も性別も年齢も異なっていたが性格もまるで違った

白虎の桜は年が恐らく12で下の子を守るお姉さん。性格は穏やか

梟の小梅は年は約4つ。ボーッと自身の世界によく入る大人しい子だ

水龍の楓は卵から生まれて二月目。（元々人族側に獣人族の中でも龍が現れたことはないらしい。ヴァンが酷く驚いていた。）好奇心旺盛な年相応の無邪気さがある。

「失礼いたします」

「今日は。信幸殿、チミツコ達」

「おやようこそ。ヴァン殿クルガ殿」

「いらっしやいませ」

七日に一度は当家に参られる二人。確か神官って忙しいよな？と思いつつ客室に案内すればサクラが茶をそれぞれの眼前の机に用意してくれた。

「ありがとう桜。気が利くのう」

「役に立てましたか？父上」

「うむ。」

ふわりと笑う桜の頭を一撫でしてヴァン達に向き直る

「信幸殿に陛下より書状を賜っております」

「陛下？」

渡された書状を見れば、まず後れ馳せながらこの世界に呼んでしまった謝罪

自己紹介

最後に選ばれた王族を紹介するので三日後の夜会に招待したいという旨が書かれていた。

「招待、有り難く。と御伝えください」

「確かに。」

さて王か。どのような方かと信幸は思案したのであった

軌跡11（前書き）

王族

軌跡11

夜会当日、他の候補者もいるとの事で王族を見るよりそちらの方が少々楽しみではある。

朝からヴァンに連れられ神殿で丁寧に身支度を整えられる（桜達は影分身が付いている。）

「素晴らしい御似合いでございます」

「元がいいと似合うなあ」

「有難うヴァン殿、クルガ殿。」

白い中国風の衣装には決して派手すぎない意匠の飾縫いがされており一目で高価と分かる

「王族について時間の許す範囲で教えていただけるか？」

「はい。」

部屋からお針子や見習い神官を出し人払いを済ませる

「まずは、当代の選ばれた姫はリリー・ハイリヒ様。正妃様の上から三番目の御子で上に王位第一継承権の皇子と第一皇姫。下に第四皇姫がいらっしゃいます」

「どっちかってーと大人しいお姫様ですよ。まあこれは御正妃様の性格を受けてだと思えますが。」

「正妃、というだけあつて側室も？」

「はい。いらっしゃいます。」

まず全員の御名をお教えいたしますね。

国王のクラヴィス様。正妃のローレンス・ハイリヒ様

王位第一継承権のシヴァ様、第一皇姫のポーレット様と第二皇姫のリリー様、第四皇姫のコレット様

側室のアリス・ロドリゲス様。王位第二継承権のビル様、第三皇姫

のキャロット様、第五皇姫のクラレス様です」

「この正妃と側室が仲悪いんですよー」

「軽く言っただけ馬鹿もの。」

正妃の出身の家が側室よりも下の位なのです。それゆえ対立は激しくて。」

「どこの世もそのようなもんじゃな。子供も仲が悪いのか？」

「シヴァ様とビル様の仲の悪さは国でも有名ですよ。女性陣は俺には分からない戦いというか・・・」

まあキャロット様とポーレット様はそこそこの仲がよろしくないと言いますが、第五皇姫のクラレス様はまだ御年9つで、正直掴みかねますねえ」

「なるほど。ドロドロじゃな」

「ドロドロっす」

軌跡11（後書き）

・・・クルガはチャライ・・・神官がそれでいいのかな

軌跡12（前書き）

王族と候補者との顔合わせ

軌跡12

「護り手候補者、信幸殿をお連れいたしました！！！！」

衛兵の声とともに重厚な扉が開かれる

「・・・随分と、まあ・・・。」

夜会の会場はこの城の中で最も広い大広間。何日も前からセッティングをしたのであろう、細部まで煌めいている。煌びやかなのは設置されている物だけではなく、夜会に招かれた貴族と思わしき面子の衣装も派手だった。

地球の中世のヨーロッパを思わせる。

信幸からしてみれば溜息ものでしかない。

「揃ったようだな」

信幸の正面、ステージに立つ10人。身なりからして王族だろう。中心の30代後半ぐらいの男が口を開いた。まあまず間違いなく国王のクラヴィスとやらであろう

「精霊の呼びかけによって護り手に選ばれし6人の強き者達よ。今日は思う存分楽しんでほしい。」

そのセリフに軽く一礼する。この世界の礼儀作法はまだ詳しく覚えていないので無作法であっても大目に見てほしいと思う。

国王の合図で様々な料理が運ばれ皆思い思いに動き出す。信幸もまた、見知った顔を見つけて側に近寄った。

この国の最高位の神官と次席神官らしいのヴァンとクルガだ。知り合いなどいない為、彼らの元に行くのはある種当然と言える

「おや信幸殿、此方にいらしてよろしかったのですか?」

「何か可笑しいかのう」

「他の候補者は王族に挨拶に行ってますもん」

「生憎、儂からは王族の機嫌を伺いに行く理由がないからのう」

「ま、確かにそうっすね」

「信幸殿、クルガ。神官が権力とは関係ない所にあるとはいえ、そういう会話は小声にしてください」

「神官は権力に関係ないのか？」

「言ってますでした？俺達は神官になった時に家名を捨てるんですよ。神官になって以降、どんな事が有っても実家には関しないんです。神や精霊と声を交わす神官が権力争いに加わったら大変ですからね。」

「なるほど。」

「納得してもらったところで、どうやら選ばれし姫の第二皇姫がいらっしゃいましたよ」

クルガの言う通り、煌びやかなドレスを身にまとった姫が近衛二人に連れられやってきた。

「貴方が、異世界からいらっしゃった、信幸殿？」

「左様でございますよ。第二皇姫様」

「第二皇姫なんて堅苦しい呼び名はやめて？私、リリーと申します。」

「リリー殿。僕は仰る通り信幸と申しますれば、貴方の護り手6人目の候補者で御座います。」

立礼を軽くする。

「どうぞ、よろしくお願いいたします」

姫に関する印象は、正直言つて微妙なものだ。

一見すると優しげで儚そうに見えるが、信幸はその人生経験から女性と言つものの本質を見てきた。

眼前にある事ばかりが正しい姿ではない事を、重々承知しているのである。

第二皇姫は正直言つて、お近づきにはなりたくない人種と本能が判断したようだった。

壁にもたれかかり、人間観察をする。

まず護り手の候補者達

一人目はヴルカーンで鍛冶師をしていたというアルフィス。

二人目はヴォールの、この王宮で近衛の隊長を務めていたオーズ。

三人目は旅人の凜翔^{リンショウ}アジア系の顔立ちだ

四人目はケヴェクスで生きる戦闘民族の族長息子、アドナン。浅黒い肌には戦闘の跡が生々しい

五人目は王宮の文官。ラジール。6人の中では最も非力に見える。

次に王族

国王クラヴィス。善政を敷くと名高い若き国王。武も嗜むらしく、その歩みに隙はない。

正妃ローレンス。淑やかに夫に従う様は嘗ての日本女性を思わせる。淡い金髪に白磁の肌は人形のようなようだ。

側妃アリス。少し高慢そうな性格に見える。結いあげた髪はローレンスより濃い金。化粧がきついのが玉にきず

第一皇子のシヴァ。賢そうな子供だ。常に前を見据えて生きているのだからその眼差しにあるのは絶対の自信

第二皇子のビル。少し垢抜けないようにも見えるが会話の端々に知が垣間見える。結構食わせ物

第一皇姫のポーレット。美しいが病弱らしい。母譲りの淡い金髪に父譲りの碧い瞳の持ち主

第二皇姫のリリー。多分甘やかされて育ったのだろう。絶対我儘だと言いきれる自信が有る。淡い金髪に母譲りの茶の瞳の持ち主

第三皇姫のキャロット。ポーレットとは違う美しさの持ち主だが、

感情を隠しきれないお子様

第四皇姫のコレット。13歳というまだ少女の域を抜けない子供。
快活な姫らしい

第五皇姫のクラレス。まだ幼い故か周りにはドロドロしているのにまだ純真のようだ

正直言おう。王族にはかかわりたくない。

軌跡12（後書き）

本音が出てしまった！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863q/>

信幸、新たなる旅立ち。拝啓親方様・・・儂は未だそちらには逝けぬようです

2011年2月23日01時23分発行